

ます。

その女の人は、須賀川の生んだ偉人、服部ケサです。服部ケサは、世界的に有名な野口英世とほぼ同じ時代の人で、女医さんです。

そのころの女の人は、ほとんど小学校までで勉強は終わりという世の中でしたから、医者になるのはたいへんなことでした。頭がいいとか、家のくらしがいいとかだけでは、なれませんでした。

野口英世は、二才のとき、手にやけどをし「てんぼう、てんぼう」とからかわれ、そのことから医者の道を選び、研究していた病げんきんにおかされて世を去った人です。ケサもまた、医者としての情熱は英世に負けないくらい、自分の命をかけて病気の人のためにつくし続け、四十才という若さでなくなりました。

ケサが医者になろうとしたわけは、いろいろありました。ケサの父真太郎は「ランプ釜屋」といって、ごぶくのあきないのほか、燈油（石油）を売っていました。須賀川を中心地、本町の商店がいの一軒でした。父は、あきないより、のほり絵